(10)桐谷誠「庄内国土計画の構想」、『東亜連盟復刻版』、第一七巻

第三編　日本農本主義の比較分析

第一章　農本主義の特徴と性格

第二編において、萩生徂来、二宮尊徳、中村直三、品川弥二郎、平田東助、石川理紀之助、前田正名、柳田国男、山崎延吉、石黒忠篤、横田英夫、権藤成卿、橘孝三郎、石原莞爾、岡田温、加藤完治、菅原兵治、有賀喜左衛門を農本主義者として検討してきた。本章においては、彼等の思想を改めて比較して見ることで、農本主義の特徴と性格を検討することにする。

第一節　農本主義の特徴

はじめに

第二編の検討を通して、各々の農本主義の特徴を、次のように要約できる。

（1）教学農本主義

(1)萩生徂来　―①農民道徳の重視、②貨幣経済許容の合理主義

(2)加藤完治　―①農民道徳、農民道の重視、②日本精神主義、③反営利主義④徳義の重視、⑤勤労主義、⑥農業主義、⑦国体主義、⑧部落共同主義、⑨耕作地主擁護、反不在地主、⑩海外植民主義

(3)菅原兵治　―①農士道の重視、②日本社稷主義、③家族主義、⑤小農主義⑥農業主義、⑦勤労主義、⑧国体主義

（2）老農農本主義

(1)二宮尊徳　―①勤倹による積小為大主義、②武士と農民の一体主義、③一円融合観、④耕作農民の自立性、自給性の重視、⑤科学性、⑥分度と推譲による共栄共存主義

(2)中村直三　―苦汁労働軽減的勤労主義、

(3)石川理紀之助　―①家族主義的自衛自立の精神、②長期的判断、③全局面的判断、④共同、平等主義、⑤報国主義、⑥勤倹主義、⑦合理主義、⑧耕作地主の容認、⑨「待ち」の思想

（3）官僚農本主義

(1)品川弥二郎　―①小商品生産的小農主義、②農の持つ社会秩序維持機能重視

(2)前田正名　―①国家主義、②共同主義、③労働生産性を視野に含む勤労重視④地主擁護主義

(3)石黒忠篤　―①自奮更生、②統制主義

(4)岡田温　―①地主擁護、②国体主義、③家族主義、④小農主義、⑤勤労主義⑥自覚更生

（4）社会運動農本主義

(1)山崎延吉　―①共同団体自治主義、②農村による都市の浄化論、③国家有機体論、④脱政治の部落共同主義、⑤精農重視、⑥多角経営論、⑦伝統行事、伝統的組織の重視、⑧小作重視の立場

(2)横田英夫　―①小作の要求重視、②愛国主義

(3)権藤成卿　―①社稷主義、②反欧米主義、③自然而治(村落自治)主義、④家族主義、⑤農業主義、⑥国体主義

(4)橘孝三郎　―①歴史創造主体としての農民論、②自給重視、③家族主義、④小農主義、⑤農業主義、⑥勤労主義、⑦反資本主義、⑧農による都市浄化論、⑨愛国同胞主義

(5)石原莞爾　―①海外植民主義、②風土主義、③多角化、畜産化、④適正規模農家論、⑤都市解体論、⑥農工一体論、⑦国民皆農論

（5）アカデミズム農本主義

(1)柳田国男　―①公益主義、②近代主義、③借地農化、自作化、④村の重視、

なお、有賀喜左衛門については、本論文においては、分量的にも検討が不十分であり、ここでは除外することにする。上記の特徴点の最大公約数として、少なくとも、①農業主義、②小農主義、③家族主義、④勤労主義、⑤共同体主義、という五点を挙げることができるであろう。地主擁護、小作重視などといった諸点は、「農本主義の性格」において、検討することになる。

第一項　農本主義における農業主義

農業主義とは、農業労働に対して、道徳的な意義や人間的価値を付与する考え方をさしている。農本主義とは、まずは農業主義なのである。但し、農業主義は、すべて農本主義であるとは限らない。例えば、道徳的な意義や人間的価値は、資本主義的農業に対しても付与できるが、それは農本主義ではないのである。また、道徳的な意義や人間的価値を付与しなくても、農業を重視する考え方はある。例えば、一国の産業の一部門である農業が、産業全体のなかに圧倒的割合を占めていることをもって、〈農業は国の本である〉と主張したり、あるいは、食糧の提供、兵士の源泉、低賃金労働の源泉といった客観的指標をもって、〈農業は国の本である〉と主張することが、そうである。それらは、道徳的意義付けや人間的価値の付与がなければ、農本主義とは言えないのである。さらに、経済的価値の源泉を農業労働に求める経済理論としての重農主義を農本主義と同一視する議論もあるが、筆者は賛同できない。それは、重農主義が資本主義的農業を前提とした理論であることにもよるが、それとともに、そもそも農本主義は経済理論ではなく、農民の社会的行為を方向付ける行為準則だからである。

この道徳的意義付けや人間的価値付与は、農業労働そのものに向けられたり、農

業の社会的役割や国家的役割に向けられたりするのである。農業労働そのものが優れた価値を有する行為であるという考え方が鮮明に示されているのが、教学農本主義や社会運動農本主義である。加藤完治の農民道や菅原兵治の農士道は、農民の道徳的生き方を強調したものである。それは、農民の問題にとどまらず、社会の秩序を維持する上で、極めて重要なことと考えられていた。社会秩序維持の役割を中心に、農業の社会的役割や国家的役割が注目されていたのである。橘孝三郎の「生産二次性原理」も、農業労働に人間的価値を付与している。道徳的に退廃した都市の解体を求めた石原莞爾派も、農村の道徳的健全性を強調していた。同様に、農村の都市浄化力に注目していた山崎延吉は、農業の特質から農民性、そして農民の共同性を説き、そこに共同団体自治の根拠を求めていた。但し、山崎は、農業が素朴、従順、呑気、思想の綺麗さ、忍耐を生むが、機転がきかず、進取の気性に乏しく、不器用、沈静、迷信をも生むと見ていた。農業労働は、功罪両面から論じられていたのである。これらに対して、前田正名や岡田温の官僚農本主義は、農業労働そのものが優れた価値を有する行為であるか否かには関心がなく、その点において、教学農本主義や社会運動農本主義とは異なっていた。むしろ、官僚農本主義は、専ら国家主義・国体擁護主義的な観点から、農業の他産業に対する生産的効果、軍事的効果、社会安定における効果などを高く評価するのである。但し、その点は、教学農本主義・社会運動農本主義にも見られるのであり、その限りにおいて、同質的である。これに対して、老農農本主義は、案外、農業労働そのものへの道徳的意義付けを積極的に行っていない。言い換えると、農民の道徳的生き方を説いていないのである。二宮尊徳は、確かに農民の自活性を誇りとしたが、〈武士の生き方に対する農民の生き方〉という捉え方をしていなかった。分度や推譲は、農民か武士かを問わず、各々が実行すべきことであった。二宮は、農民が真面目に勤労に励むようになるために、道徳心の向上に苦心したが、農民らしい生き方を説いたわけではなかったのである。そもそも、二宮においては、農業労働は「人道」であり、それは道徳的なこと以上に、自然に従いながら自然を統御する科学的な営みであったのである。中村直三においても、農業労働は、道徳的なことというより、つらく厳しい行為であった。石川理紀之助においては、「天地の恩」が指摘されるが、農業労働を道徳論としては述べていない。老農農本主義にとっては、農業労働は、厳しい現実的な農業生産の行為であったのである。老農農本主義は、むしろ農業の社会的役割や国家的役割に、意義・価値を付与する。農民は自分の利益のためだけに耕作行為を行っているのではなく、社会のため、国のために尽くしていることを訴えているのである。その帰結点においては、教学農本主義、社会運動農本主義、官僚農本主義、老農農本主義は、共通している。

このように、農業労働に対して、道徳的な意義や人間的価値を付与する考え方の

背後には、自然性と人間性の関係に対する見方(自然観、人間観)があると言うことができる。但し、自然性といっても、人間の内にある自然性と人間の外にある自然性を考えることができるし、人間性といっても、人間の性質と同時に、人間が作り変えた自然に付与された人間性を考えることができる。それらを踏まえて、自然性と人間性の関係に対する理解としては、①自然性に力点を置き、自然性に人間性が包摂されているという理解、②自然性と人間性の双方に力点を置き、自然性と人間性は一体となって調和しているという理解、③人間性に力点を置き、人間性は自然性に挑戦し、それを人間に好都合に変革していくという理解、があるであろう。①は、自然に畏敬の念を抱き、自然を崇拝するもの、②は、自然に対する畏敬の念は薄いか存在せず、自然を変革するというよりも、自然と共存しようとするもの、③は、自然崇拝がなく、自然を客観的に捉え、自然を変革する人間の作為を重視するもの、である。権藤成卿の「社稷」論、橘孝三郎の「土の日本」論、山崎延吉や石原莞爾派の「農の浄化力」の重視など、社会運動農本主義は、①の考え方のようである。岡田温は自然を「無尽蔵」であると捉えており、①ではないかと考えられる。前田正名は、楽観的自然観を示している限りで①の考え方であるかの如くであるが、豊かな自然に埋没して農業の進歩を図ろうとしない悪習慣を改良すべきことを主張しており、基本的には②の考え方であると見ることができる。教学農本主義はどうであろうか。加藤完治は、自然と我が一体となる「自然我」を強調していた。調和論の菅原兵治は、「自然が本で、人間が末」と捉えていたが、自然と人間は、農の「文」(統一収蔵作用)において、一体となると考えていた。こうして見ると、教学農本主義は、②の考え方のようである。しかし、萩生徂来は、作為を強調していた。だが、作為の背後に「天道」が想定されており、突き詰めれば、②の考え方であったと考えられる。老農農本主義においては、先に指摘したように、農業労働は、厳しい現実的な農業生産の行為であった。したがって、老農農本主義は、③の考え方なのである。アカデミズム農本主義の柳田国男も、農業を「人の意志の発動」と捉えており、③の考え方である。これらの相違は、農本主義と天皇制の関連にもつながることである。綱澤満昭が指摘するように、新嘗祭に見る天皇と自然の一体化、すなわち、天皇が「生活思想の根底にある日本的自然」を象徴するものであるなら、①と②の考え方は、天皇制に結び付くことになろう。但し、それは自然観において結び付くのであり、論理上のことではない。権藤成卿の社稷論は、論理的には、天皇制国家が社稷を軽視すれば、社稷に基づく新たな国家が建設されなければならないのである。橘孝三郎の土百姓主義も、同様である。しかし、③の考え方は、自然観において、天皇制と結び付くわけではない。老農農本主義が、天皇制と結び付くのは、むしろ家族主義の祖先崇拝や、共同体の象徴を求める共同体主義との関連からであろう。柳田は、天皇個人の資質に注目し、それを高く評価していた。

なお、権藤成卿は、米と麦では農村構成が異なるとして、日本を米で考え、小麦に立脚した西洋の制度の導入を批判していた。石川理紀之助も、米を中心に議論していた。しかし、農本主義者は皆、農業労働の意義を米を前提に論じていたわけではない。橘孝三郎は畜産化を強調し、石原莞爾派も水稲支配を批判して適地適作を主張し、山崎延吉は多角経営化を主張していたことも、再度指摘しておきたい。

第二項　農本主義における小農主義

農本主義は、農業の経営形態として、小農経営を理想とする。大農(資本主義的農業経営)を理想とする考え方は、いかに〈農は国の本である〉と主張しても、農本主義とは言えない。本論文において、老農農本主義を官製化した開明派官僚の勧農政策、新渡戸稲造の貴農説などを非農本主義と見たのは、そのためである。農本主義は、資本と労働の関係からは出てこないのである。したがって、前項において、農本主義が農業主義であるという場合も、小農的な農業主義でなければならないことは言うまでもない。

さて、この小農主義を、零細農耕の固定化と見たのが、桜井武雄であった。しかし、小農主義は零細主義なのであろうか。まずは、農本主義者たちのいう小農とは何かを確認しておこう。橘孝三郎が言う「家族的独立小農」とは、「主人夫婦老人子供先ず六名の人員を有し、役畜一頭を有す耕地面積水田六反歩畑六反歩(1)」の農家をさしていた。そこでは、「自らの労力を商品化して他に提供する事なき一方、他の商品化されたる労働を、余剰価値蓄積の目的のために他より購入する等の事はない(2)」のであり、「使用価値のみを目的として生産に従事しておる限りに於て資本という存在は経済現象内に客観化されるものではない(3)」として、自給性の意義が指摘されていた。したがって、「家族的独立小農」とは、自給的で非資本主義的な農業経営体をさし、小作農家をも含むものであったのである。これに対して、権藤成卿は、社稷(土地と食糧)の安定化を強調し、その主体と関連して、「耕地の改良に最も効力あるは、その土地が自作農によって所有せられることである(4)」として、自作農主義の立場に立っており、橘孝三郎とは異なっていた。加藤完治も、自給自足の自作農家を理想としていたのである。また、岡田温は、大農に対する小農という捉え方をし、「小農更生の原理を、大経営の理論中に求めても、杉山で松茸を探すようなもの(5)」であると述べていた。大経営(大農)とは「資本を中心とした経営」であり、小農とは橘孝三郎と同様に、非資本主義的農業経営体をさす。しかし、「自給化にかぶれて無理に自給せんとすれば不利益不合理が生ずる(6)」と指摘する点で、自給を理想とする橘とは異なるのである。品川弥二郎、前田正名、石黒忠篤、岡田温など、官僚農本主義は、農家が商品生産に対応できるようになることを、政策目標としていた。但し、品川、前田、岡田らの保守官僚農本主義は、

自作小地主を重視し、革新官僚農本主義の石黒忠篤は、小作農家を重視していたのである。こうして、農本主義は、自作農家を中心としながら、小作農家も、自作小地主も含めて、支持基盤としていたのである。

このように、橘や権藤、そして岡田らのさす「小農」の内容は異なるが、小農性とは零細性であると捉えられていたわけではない。しかし、確かに彼らは零細性の問題に楽観的であったことは指摘できる。それどころか、橘は「耕地の経済的面積はその空間的面積に逆比する(7)」として、零細性の利点を強調し、岡田も「経営規模の小さい小農制は、……集団的に村落的に観たならば、村全体のものが安住の天地を得、平和な安定した幸福な生活を営み得る制度である(8)」と肯定的に評価していた。このように、農本主義とは零細主義であるとは言えない。加藤完治や石原莞爾は内地開拓や満蒙開拓を主張し、むしろ規模拡大主義である。加藤は適正規模として、「まあ二町歩位から始まって地球全体がよかろう」などと言う。農民道場も、比較的上層が対象であったのである。また石原の「適正農家」は、二町以上層をさし、事実上自作上層が理想であった。なお、零細制の問題を感じていなかった橘は、満蒙開拓に批判的であったのである。老農農本主義にとっては、規模拡大自体は望むものであったであろう。しかし、老農農本主義の共同主義の立場からすれば、他の農家が没落することによる規模拡大は、望むものではなかったと考えられる。このように、小農主義といっても、①自給的性格に注目するのか、小商品生産的性格に注目するのか、あるいは、②小作農家や自作地主を含むのか、それとも含まないのか、さらに③零細制を問題視するのか、それとも問題視しないのか、といった諸点において、相違がある。しかし、農本主義が小農民に依拠する考え方であることは、共通して言えるのである。それは、本論文において、筆者が、意図的に大農論者を農本主義から除外した結果ではないか、と言われればそれまでである。しかし、桜井武雄のように、大農論者まで入れて農本主義を捉えるのでは、〈農業は国の本である〉という考え方が、すべて農本主義になってしまう。本論文においては、農本主義を、もう少し狭く考えている。

註

(1)橘孝三郎『農村学前編』、建設社、一九三一年、一三五頁
(2)橘孝三郎『農業本質論』、二〇一頁
(3)橘孝三郎『農業本質論』、一一五頁
(4)権藤成卿『農村自救論』、文芸春秋社、一九三二年、一九四頁
(5)岡田温『農村更生の原理と計画』、日本評論社、一九三三年、五頁
(6)岡田温『農村更生の原理と計画』、三四頁
(7)橘孝三郎『農村学前編』、五七頁

(8)岡田温『農村更生の原理と計画』、五頁

第三項　農本主義における家族主義

小農は家族経営であり、したがって小農主義は家族主義(1)ともなる。農本主義者は、家族を重視する点において、共通している。しかし、家族を重視する理由は異なっていると考えられる。社会運動農本主義、官僚農本主義、教学農本主義は、農業主義において検討した自然観とともに、家族(農家)において培われる「心」・「情」によって社会秩序や国家・国体の安定を可能とするものとして重視している。権藤成卿において、農業主義の自然観から家族主義が捉えられ、それが国家、国体と結び付いていくことが鮮明に示されている。権藤は、家族の「夫婦相愛する心、其子の父母を思ふ心、父母の子女を慈む心」が、「親族朋友」、「近隣井伍」、「一郷一邑」、「郡国」、「天下」に及んで行くと考えていた(1)。その基礎には、「農耕民族となれば、実に固き収結力を成す」との指摘(2)、あるいは、民性は皆同一であることが、その性から起こる情が協合する根拠であるとの指摘に見るように、農耕の本質や民性があった。すなわち、家族主義は農業主義から説明され、小農という農業の「形態」から説明されているわけではない。権藤の家族主義は、農業主義との関連で論じられ、そこから「天下」に及んでいくのである。加藤完治においては、家や村は「一つの大きな命」であって、「大日本帝国という大きな命」にとけ込むことで、われわれは永遠に死なないと論じられていた(3)。橘孝三郎においては、「家族的独立小農」の「自利他利融合」という性質が、共同体社会としての「完全全体国民社会」建設の根拠にされていた。岡田温は、「国体を擁護するには、家族制度の維持が必要である(4)」と明言していた。このように農本主義は、家族(農家)を、そこで培われる「心」・「情」によって社会秩序を可能とし、国体を擁護するものと考えていたのである。但し、ニュアンスの差はあると考えられる。官僚農本主義においては、家族主義が国体擁護のための戦略的色彩を帯びているが、社会運動農本主義や教学農本主義においては、家族は倫理的にも崇高なものと考えられていたのである。これらに対して、老農農本主義は、異なった立場から家族主義を重視していた。例えば、石川理紀之助は、「歴観農話連心得書」において、「加入せんと欲する人は、此心得書を家族に言聞かせ、納得の上たるべし(5)」と述べていた。だから、家族は、倫理的なものと考えられていたわけではないし、国体擁護の戦略から重視されていたわけでもない。家族員の合意がなければ、家族農業は成立不可能であると考えられていたのである。

註

(1)権藤成卿『農村自救論』、文芸春秋社、一九三二年、二一～二二頁

(2)権藤成卿『農村自救論』、文芸春秋社、一九三二年、五六～五七頁

(3)加藤完治「皇国農民精神」、農業報国連盟『皇国農民の道』所収

(4)岡田温『農村更生の原理と計画』、日本評論社、一九三三年、一一頁

(5)石川理紀之助「歴観農話連心得書」、『明治大正農政経済名著集』一四巻、二八七頁

第四項　農本主義における勤労主義

農本主義は、農業主義において検討したように、農業労働に対して、道徳的な意義や人間的価値を付与する考え方であった。だから、農業労働に励むこと＝勤労は、当然、求められるのである。この勤労主義は、桜井武雄が言うように、劣悪な現状を肯定する保守的な考え方なのであろうか。例えば、加藤完治は、勤労に基づかない利益を嫌っていた。すなわち、「地主などといって、真剣な労働もせずに、ただ食っている。これは労働忌避の不忠な行為である(1)」と述べていた。労働運動を批判するのも、労働運動家が労働嫌いであると見ていたからであった。加藤は、「宗教も教育も政治も何もかも、この労働を離れて日本には無意味(2)」であると考えていた。勤労を通しての作物と人間の生命の磨き合いが目的なのであり、儲けることが目的ではなかった。また、「ブツブツ言いながら働くのは動物だ、黙々としてただ働くものは機械だ、自覚せず働くのは無意義だ、自覚して生き生き働くのは人間だ(3)」と述べている。だから、加藤にとって、ただ労働を強化するのは、勤労ではないのである。菅原兵治も、「金のかけざる農楽の生活、是こそ実に農本生活の誇りであらねばならない(4)」と述べていた。また、社会の現状も農事の進歩も知らないで、ただ働くことを、「無自覚的態度」と呼んでいる。このように、教学農本主義の言う勤労とは、自己実現をさすと言うことができる。

社会運動農本主義においては、勤労は土地支配の根拠であり、理想国家の構成原理であった。権藤成卿は、満州国家に関連して、社稷を基礎に超国家主義的になっていたが、それは、土地支配の根拠を勤労に求めたからである。また、橘孝三郎は、「土の勤労生活」と言い、土百姓が歴史創造の主体となって形成すべき理想社会を「勤労者国民社会」と呼んでいた。勤労を基礎とする社会が理想だったのである。これに対して、老農農本主義にとっての勤労は、農家の生計維持が目的であり、生活防衛の合理的手段であった。だから、勤労は、二宮尊徳、中村直三、石川理紀之助のいずれにとっても、労働生産性の向上をも含んでおり、苦汁労働の軽減、増収品種の改良などを伴うことであった。しかも、先祖を敬い、子孫のことを考える勤労であったのである。このように、老農農本主義の勤労は現実的であり、教学農本主義の勤労のような道徳的、哲学的意味付けは鮮明ではない。しかし、老農農本主義、教学農本主義、社会運動農本主義のいずれもが、牛馬の如く働けという滅私奉

公的な労働強化を主張してはいなかったのである。

それでは、官僚農本主義にとっての勤労は何であったか。前田正名においても、勤労は労働の改善を含むものであり、滅私奉公的な労働強化ではなかった。しかし、岡田温になると、勤労とは、「賃金を支払はないで忠実に働く(5)」ことを意味している。すなわち、マルクス主義と同様に、無償労働をさしているのである。それを岡田は肯定し、マルクス主義は否定したのである。その限りで、岡田の勤労は、滅私奉公的な労働強化に近いのではないかと考えられる。筆者は、農民の勤労性の内在的理解が、耕作農民の思想と行動を理解する上で、きわめて重要であると考えている。それは、先祖から子孫へと継承される「家」の勤労性でもある。そこに、創造の喜び、誇り、苦悩、悲しみ、先祖や子孫への想い、村社会の人間関係性への配慮など、農民の生き方が凝縮されていると理解すべきである。この農民の勤労性が、①仲間内での非競争原理、②総合的判断性(時間幅を長期にとった判断、生産・生活の全局面を考慮した判断)、といった農民的思考の源泉である。筆者は、この直接農業労働に携わる者の〈心性〉こそ、農民的思想・行動の基底をなすものであると考えている。

註

(1)一笑会機関誌「弥栄」第四七号、一九二六、五三頁

(2)『加藤完治全集』第四巻、上巻、三六四頁

(3)『加藤完治全集』第四巻、下巻、二五六頁

(4)菅原兵治「農士道」、『菅原兵治全集』第一巻、四九頁

(5)岡田温『農村更生の原理と計画』、日本評論社、一九三三年、七頁

第五項　農本主義における愛国主義、日本主義

愛国主義は、さまざまな立場から主張されるが、農本主義による愛国主義を鮮明に示したものとして、橘孝三郎「日本愛国革新本義」がある。橘の愛国主義は、「愛国同胞主義」であり、橘の愛国主義の根拠は同胞主義に求められていた。橘は、「俺達日本人はみんな誰もが同胞だったのではないか(1)」と言う。こうして、個々人の差異が捨象され、同胞という同質的な日本人が措定される。橘の愛国主義は、日本主義であった。それでは、橘において、農本主義と愛国主義はどのように関連しているのであろうか。橘は「まことに世界の大勢は我々をして民族主義、国民単位主義を採らねばならんやうに推移してをる(2)」という現状認識から、「国土の根本」に戻り、一切が共栄共存の協同主義の上に置かれなくてはならないことを強調するのである。農本主義には、反個人主義が、したがって共同体主義が共有されている。橘においては、この農本主義の共同体的協同主義が基礎となって、「国民

協同自治」が説かれている。橘の愛国主義は、同胞の国民的協同自治の体制を構築する主張であった。したがって、橘の愛国主義においては、「一切は国民社会本位的に合理化されな」ければならないが、それは、国民を国家的に統制する考え方ではなく、「地方協同体の共同自治制体を土台として、根本的に築き改めねばならない(3)」という考え方になる。こうして、橘の愛国主義は、中央集権制を求めず、地方分権制を求めるのである。筆者は、橘の「愛国同胞主義」が、社会有機体論的発想に基づいて、農民・農村の原理を社会・国家の原理に適用させたものであると考えている。

加藤完治においては、日本主義が鮮明に示されている。それは勤労主義との関わりから説かれている。すなわち、加藤の勤労主義は、小農の個人的勤労を意味するのではなく、食糧増産であって、戦線で闘うことと同じであった。農民も兵士もともに日本人としての信念のうちにある。加藤は、天皇陛下万歳こそ日本精神であると主張し、日本人としての立場を重視すれば私欲を捨てられ、信念があれば思想撹乱も経済撹乱も歯が立たないと主張するのである。このように、農民の生き方こそ日本人の生き方であるとして、農本主義は日本主義となるのである。そして、日本人の生き方は、「普遍我」として、「大きな命」のなかで永遠に生きることだと考えられ、その「大きな命」を示すものとして、国家とその中心たる天皇を位置づける。加藤の日本主義は、愛国天皇主義となるのである。こうして、加藤は、一方で勤労農民の立場に立ちつつ、他方で農地を荒しては「陛下に対し奉り申し訳がない」といった愛国主義を一貫して示している。勤労主義から愛国主義が説かれているとはいえ、勤労主義が愛国主義とならなければならない必然性は不明確であった。また、愛国主義から勤労が求められたりもする。筆者は、加藤においては、勤労主義と愛国主義は二元論であったと考えている。

石原莞爾は、東亜を連盟させる大東亜主義の立場に立っていた。これは、愛国主義を基本にして構想されてはいるが、論理的には、日本主義を超えている。加藤完治と石原莞爾派を比較すれば、アジアに対する考え方が、微妙に違っている。加藤は、例えば、朝鮮開拓者が朝鮮化するのではなく、朝鮮人の日本化を図るべきことを主張していた。石原莞爾は、少なくとも論理上においては、東亜諸国は同胞であり、各々の自立を前提とした連盟を構想していたのである。勿論、東亜連盟の盟主が天皇であると考える限りにおいて、東亜連盟論も日本主義であるとも言えよう。しかし、欧米覇道主義との世界最終戦争に勝ち抜くためには、日本主義を超えて、大東亜主義に立たなければならなかったのである。

ところで、同じく愛国主義・日本主義といっても、論者により、論理展開の方向性に差異がある。岡田温や石原莞爾においては、国体が先にあり、それを守る家族経営農業や適正農家があった。それに対し、権藤成卿にとっては国民生活の基本で

ある社稷が、橘孝三郎にとっては土百姓が先にあり、そこから国体に向かうのである。菅原兵治も、権藤と同様に、社稷を重視するが、菅原は日本社稷と支那社稷を区別し、日本社稷には、支那社稷のように、社稷と天子が対立したとき、天子を軽んじることはないと指摘していた点で、権藤とは異なっていた。菅原も、社稷主義と国体主義をはじめから予定しており、加藤と同様に、二元論的であったと考えられる。石川理紀之助にも国家意識の表出が見られた。それは、農民の発展は国家の発展に結び付いてこそ、意味を持つと考えたからである。老農農本主義においての愛国主義・日本主義は、先祖から子孫へと連続する家の論理を前提としていると考えられる。老農農本主義が自由主義を受け入れず、統制主義的な面を持つのは、農村社会における無競争主義、共同主義を実現する手段としてなのである。

このような各種農本主義の論理展開の方向性は、これまで検討してきた五つの農本主義の諸特徴の関連の問題でもある。農本主義の五つの特徴は重なりあうとしても、論理的には別個のことであろう。小農は家族であるが家族は小農以外も含むし、勤労は労働者にも当てはまる。農業の本質は資本主義的農業にも指摘しえるし、労働者や資本家にも愛国主義者は存在するのである。また、どの特徴点を強調するのかという違いもあった。したがって、すべて重なるものを農本主義の典型と考え、どの特徴点を含み、どの特徴点を重視するかで、農本主義を把握することもできるであろう。こうした視点から再整理すると、例えば、橘孝三郎は、農業主義(生産二次性原理)に、小農・家族・勤労主義(家族独立小農)を位置づけ、歴史創造群としての土百姓が創造する「完全全体国民社会」を対象とする愛国主義へ向かったと考えられる。権藤成卿は、農業主義(農耕の収結力)から家族主義(夫婦相愛する心など)を説き、そこから愛国主義(社稷体統の国性擁護)へと向かったのである。それに対し、加藤完治は、一方で農業主義(農業は天地の化育)・勤労主義(金儲け批判)を、他方で愛国主義(日本精神)を強調するわけである。その媒介項が家族主義(家系重視)であった。なお、加藤は日本精神鍛錬のための農業実習を重視しており、愛国主義と農業主義が双方向的に結合されていたのである。ところが岡田にあっては、立論の基礎がまず国体擁護(愛国・日本主義)におかれていた。農業主義(無より有を生ずる)や家族・勤労・小農主義(家族経営農業)は、「皇室の弥栄へを希ひ、天壌無窮に国体を擁護する(4)」条件であった。そして石原莞爾派も、愛国主義の立場がまずあり、そこから「農村改新」を論じ、課税操作によって「適正規模農家」へと規模拡大を図り、農業・農村の論理で工業及び都市の論理を浄化することを理想としたのである。

註

(1)橘孝三郎「日本愛国革新本義」、『現代史資料』五、みすず書房、一九六四年、

四七頁

(2)橘孝三郎「日本愛国革新本義」、『現代史資料』五、四八頁

(3)橘孝三郎「日本愛国革新本義」、『現代史資料』五、八七頁

(4)岡田温『農村更生の原理と計画』、日本評論社、一九三三年、一一頁

第二節　農本主義の性格

第一項　農本主義の思想的性格

農本主義は国家の支配思想なのであろうか、それとも農民思想なのであろうか。このように、二者択一的思考をすること自体が正しくないのかも知れないが、どちらを基本と見るかは重要であろう。その点で、農本主義と国家政策には、共鳴と対立の両面が指摘できる。農本主義の勤労主義は、自力更生と一致するのであり、岡田温は、「無尽蔵の自然物を自由に使用すること」に自覚更生の根拠を求めていた。官僚農本主義は、そもそも農政そのものであり、国家の支配思想を反映するものであることは否定できない。保守官僚農本主義は地主媒介の間接型国家支配に対応するのものであり、革新官僚農本主義は直接型国家支配に対応するものであった。また、加藤完治の農民道場は、満州農耕移民の指導育成を主要任務の一つとし、経済更生運動の中堅人物養成を直接の目的としており、国家政策そのものであった。しかし、少なくとも理論的には、多くの農本主義者が産業組合主義による統制化に批判的であった。例えば、権藤成卿は、村落自治を基礎とした地方分権を主張し、特殊権力者を認むる必要はないと考えていたことは、何度も指摘した通りである。橘孝三郎も、信用・購買・販売の三位一体的総合組合の設置で耕作農民の経済力の自立化を求めたのであり、統制化を主張したわけではない。加藤完治は、「主要食糧は国家が統制して全国的に食糧不安がないようにしなければならぬ(1)」と、食糧統制の必要性を強調してりたが、同時に、産業組合主義に含まれる営利主義的傾向を批判していた。また、老農の清水及衛に学び、産業組合を経済効率の問題ではなく、徳義の向上の問題としていたのである。勿論、国策との対立面をもって、農本主義を農民思想と捉えるのは短絡的であろうが、農本主義を政策遂行の思想的手段としてのみ理解することは一面的であると言うことができる。

ただし、戦時体制期への移行によって、農本主義と統制化は、関連を深めていくことは事実である。そこで、農本主義は本来国家至上主義的であったのか、農本主義が変化して戦争協力の国家至上主義となったのか、が問題となる。変化と見る場合も、内在的論理の展開によるか、外的条件によるかが問題となる。その点で、加藤完治の皇国農民思想は一貫しており、戦時体制への突入で国家主義的になったというものではない。岡田温や石原莞爾も同様であろう。しかし、権藤成卿や橘孝三郎においては、天皇制国家が「社稷観」や「土百姓」を軽視したと判断されれば、

天皇制国家をも否定する可能性が論理構造上、含まれていたのである。既に触れたように、橘孝三郎は、「日本は愛国同胞主義によって生き、愛国同胞主義は国体に生きる」と説くが、権藤成卿と同様に、「中央至上主義的な集権性のごときは、根本的に改められて地方分権的のものとなし(3)」として、中央至上主義をも否定する。つまり、中央集権は中央官僚の私腹を肥すもので、真の愛国主義ではないと考えられており、しかもその愛国主義は社稷主義や士百姓主義から論理的に導き出されたものである。それ故、本来愛国主義という場合の愛すべき国とは、権藤や橘の理想社会であり、現実の天皇制国家である論理的必然性はないのである。しかし現実的には天皇制国家となる。それは、橘が「王道」を求めていたことによる。その実践者である天皇は別格であり、政党、財閥など、政治的・経済的支配者を否定しても、天皇の否定には帰結しない論理構造となっているのである。また、「世界の大勢」の認識といった外的条件の影響も大きいと考えられる。

以上のことから、本論文においては、農本主義を、まずは農民思想と理解する立場に立っている。それを、さまざまに利用し、編成替えするなかに、全体としての農本主義の構造が形成されてくると考えるのである。

註

(1)加藤完治「皇国農民精神(五)」、農業報国連盟『皇国農民の道』、一九四三年、九〇頁

(2)「弥栄」一四一号、一九三四年

(3)橘孝三郎「日本愛国革新本義」、『現代史資料』五、八七頁

第二項　農本主義の階級的性格

桜井武雄のように、農本主義を、基本的に、封建思想と見る論者は多い。そこで、桜井は、農本主義者は封建制を暗黒に描くことを欲しないと指摘している。確かに、権藤成卿は、「明治の基督教国に模擬せし制度に至りては、遺憾ながら我国民の社稷的道統を、惜気もなく破却したものである(1)」と述べていた。つまり、明治になってヨーロッパの法制度が持ち込まれたために、社稷観が崩壊してきたと見ており、明治以前の方が良かったと見ていたことが分かる。橘孝三郎も、「鎌倉時代は日本中興の時代であったと同時に、日本は農本的に最も健全にして充実せるの実情を示しておつた(2)」と述べており、封建賛美の面を指摘できる。彼は農村疲弊の主因として、資本主義の破農性を指摘したが、資本主義とは欧米型の歴史的進化であり、権藤と同様、明治になって持ち込まれたものであった。加藤完治も、「農業を営む農民自身の内に、真に農業の大切なこと、農業の尊いことを深く信ずる人が少なくなった(3)」と指摘する。逆論すれば、昔は多かったということであり、過

去を肯定的に見る視点のあることが分かる。しかし岡田温は、「徳川政府の施政方針は、農民に更生し得るほどの自力を持たせない(4)」と指摘していた。近代化論的発想を持つ岡田にあっては、封建賛美ではなく、現に存在する国体の賛美こそが重要だったのである。また、既に触れた山木武夫など加藤完治の弟子たちの山形県荘内地方における農業倉庫建設運動は、「御家禄派」と呼ばれた旧藩主勢力＝封建勢力との闘争であり、農本主義は反封建主義であった。さらに、農本主義は不在地主を批判するのであるが、それも、封建主義の立場からなされたわけではない。こうして見れば、桜井のように、農本主義を封建思想と捉えることには、疑問が生ずるのである。そもそも、農本主義が封建思想であるなら、その土壌をなす「半封建制的零細農耕」の疲弊に伴い、農本主義も衰退すると考えるのが普通であろう。ところが、桜井は、思想基盤の崩壊に伴う危機意識の高まりで、農本主義はむしろ活性化すると考えていた。しかし、客観的基盤を失ったものが、なおかつ強力に存続し続けるとは考え難いのではないか。存続し続ける限り、そこには客観的根拠と基盤がなければならない。その点に関わるが、本来、半封建的性格と言う限り、他の半面を前提としている。すなわち、半近代的性格である。だから、講座派的見方をしても、農本主義における半近代的性格の存在を否定することはできないのである。すなわち、農本主義にも半近代的性格が内包されているからこそ、農本主義は近代社会においても存続が可能となると考えることができる。いずれにせよ、農本主義のすべてを封建思想と見ることには、無理があるのである。

また、農本主義の階級的性格をめぐっては、農本主義と地主的性格の関連が問題になるであろう。桜井武雄の言う「くずれゆく小農」とは、基本的に小作経営をさしている。この小作経営の崩壊に危機感を抱くのはまず地主である。したがって地主の立場から小農保護を主張する地主的農本主義が想定できるのである。老農農本主義も、保守官僚農本主義も、地主擁護の立場にあった。この地主の立場と耕作農民の立場の違いは、論理上勤労主義が明確か否かにある。勤労主義は反不労所得主義であり、反地主的であるからである。桜井武雄は、加藤完治も地主的農本主義であると見るが、加藤の思想の根源には勤労主義があり、地主的とは言えないであろう。荘内地方の山木武夫たちの産業組合自立化運動も、「御家禄派」との闘争であったが、同時に、自作上層を中心に大地主の経済力からの自立化を求めたのであり、地主的農本主義ではなかったのである。

また、桜井武雄は、橘の農本主義を小ブルジョア農本主義と規定したが、これは妥当であろう。小ブルジョアとは、自作地主から小作までを含むものである。しかし、マルクス主義の説く小ブルジョア的性格には、衝動性、動揺性、急進性、空想性といった幼稚性ともいうべき否定的評価が暗黙に了解されている。すなわち、桜井は、「恐慌によってその物質的基盤をゆさぶられた小ブルジョアの、『全霊的』

衝動に駆り立てられた結果があの五・一五事件である(5)」と分析している。橘の「家族的独立小農」も観念的であり、そこに小作貧農も含められ、半農奴的零細農耕が美化されると見るのである。このように、桜井は、「観念的に設定・理想化された『家族的独立小農』の幻想の上に、ピラミッド形につみ上げられた農本主義のユートピア(6)」が、完全全体国民社会であると捉える。しかし、小作をも含む勤労農民の小ブルジョア的性格を否定的に把握するだけでは、マルクス主義は農民勢力の支持をえられない。農民を労農同盟の真の対象とするには、農民を無知で無力な存在と捉えず、啓蒙、保護、指導の対象とする発想からの転換が必要であったのである。また、零細農耕が資本主義の基底をなす以上、資本家の立場からの小農保護論(酒匂常明など)も想定できるが、本論文においては、そうしたものは、反農本主義であると捉えている。

さらに、農本主義の階級的性格をめぐっては、農本主義と資本主義との関わりが検討されるべきであろう。その点で、農本主義は、地主批判より資本主義批判を基調としていると言うことができる。加藤完治に、不在地主批判と在村地主容認の両面のあることは既に触れたが、資本主義批判は金儲け主義批判として徹底している。権藤成卿においても、「村内の大地主が無意識的に其所蔵米穀を放買する結果、村内の食糧定額に不足を生じ(7)」ることや、不在地主が「他村民の侵耕」を招くことが批判されていた。その際、加藤は部落協調主義から、権藤は「人はすべて天の寵児である」との考え方から、階級関係を否認していた。しかし、権藤は、資本権力の脅威として、村落の自治機能の破壊をあげ、「村内の農地が、他村資本家の並有する所となり、其小作米徴収に依り、村内食糧定額に不足を告ぐる地方は最も多い。これ村落の発達上憂ふ可き現象(8)」であると述べており、資本家批判の論調は厳しい。橘孝三郎も、資本主義の破農性を告発していたことは、既に述べた。

こうした農本主義の資本主義批判の本質を、桜井は、すべて資本主義が悪いとして小農制自体の問題、したがって半封建的農業構造、それに立脚する天皇制国家全体の問題を隠蔽するものと見ていた。桜井からすれば、農本主義は、零細農耕を維持固定化する封建思想ではあったが、そのことによって工業部門の資本主義の発展の基礎を与えるという、資本主義擁護の機能を果たすものであった。確かに、農本主義の資本主義批判は、社会主義へは接近せず、小農擁護、国体擁護に向かう。そこには、後述するマルクス主義批判があったのである。そして、岡田や石原のように、はじめに国体ありきの場合は、国体擁護の立場から社会主義思想に反対するのは当然であった。しかし、資本主義勢力が天皇制国家の一大支柱であった以上、農本主義の資本主義批判は、体制批判の視点を内包するはずである。既述のように、権藤や橘の理想社会が天皇制国家でなければならない論理的必然性はなかったのである。また、荘内地方の山木武夫は、産業組合勢力をバックに衆議院選挙に出馬し、

翼賛候補と対立したことも注目される。荘内地方においては、翼賛体制とは御家禄派体制をさすため、体制批判とは言い切れないが、農本主義には「信念」があり、「非妥協性」を指摘することができる。同時に、農本主義が封建思想や地主に批判的な面を有する限りで、資本主義との親近性も指摘すべきであろう。それは、橘や石原や加藤が、農業あるいは土によって浄化された農村工業の導入を重視したことにも示される。彼らは単に、歴史を逆転させる復古主義者ではなく、農の論理で浄化された資本主義の統御を考えていたのである。

以上のように、農本主義といっても、重視する特徴点の違い、依拠する農民層の差異により〈多様性〉がある。また、地主的か農民的かという〈矛盾性〉もある。さらに、多くの農本主義者は実践が重要であったのであり、経験の蓄積はあっても、確固たる理論体系を必ずしも持っているとも言えず、〈非体系性〉が指摘できる。但し、菅原兵治、権藤成卿、橘孝三郎においては、農本主義は体系的に論じられている。そして、いかなる社会勢力との関わりを持つかといった具体的な状況に応じて、具体的な行動をとるという〈状況規定性〉がある。したがって、階級利害が対立する場合でさえ、農本主義が双方の思想基盤となっていたりする。荘内地方においては、「御家禄派」は菅原兵治の農本主義を思想基盤とし、山木武夫たちの産業組合青年連盟は加藤完治の農本主義を思想基盤とし、東亜連盟荘内支部は、石原莞爾派の農本主義を思想基盤として、互いに対抗、緊張の関係を織りなしていたのである。このように、農本主義といっても中身はそれぞれ異なった思想だと見れば、農本主義とは、異なった思想の総称にすぎないということにもなる。そこで、この農本主義の〈多様性〉、〈矛盾性〉、〈非体系性〉、〈状況規定性〉を、どう捉えるかが問題となる。筆者は、抽象的に言えば、もともと同一の思想基盤にあっても、どんな状況のもとで、どんな方法でそれを明示化するかによって、異なったものに表現され、やがて異なった思想として編成されていくものと考えている。つまり、農本主義には、基本的に勤労農民的性格があるが、これが東洋古制度学の目で、社稷観に貫かれた日本の伝統的な制度の基礎として捉えられると、権藤成卿の社稷農本主義になる。この勤労農民的性格を歴史創造の根拠と見て、土百姓を歴史創造群とする理想社会を創造しようとすると、橘孝三郎の勤労農民的農本主義になり、この勤労農民的性格が神道的に理論化され、内外開拓・植民、中堅人物養成といった国策の遂行と結合すると、加藤の教学農本主義になるのである。また、農村経済更生政策を遂行する帝国農会の立場から見ると、勤労農民的性格は自力更生の根拠となり、国体擁護の条件と捉えられ、それが岡田の国体主義的農本主義になる。戦時体制期になると、思想戦、経済戦といった国防上、勤労精神が重視されるが、それだけではなく、世界最終戦争に打ち勝つための農村改新が運動化されると、石原莞爾派の社会運動農本主義になるのである。

註

(1)権藤成卿『農村自救論』、文芸春秋社、一九三二年、三七頁

(2)橘孝三郎『農村学(前編)』、建設社、一九三二年、一四〇頁

(3)『加藤完治全集』第四巻下巻、加藤完治全集刊行会、発行年非明記、二五七頁

(4)岡田温『農村更生の原理と計画』、日本評論社、一九三三年、四三頁

(5)桜井武雄『日本農本主義』、白揚社、一九三〇年、一二七頁

(6)桜井武雄『日本農本主義』、一二九頁

(7)権藤成卿『農村自救論』、文芸春秋社、一九三二年、一五五～一五六頁

(8)権藤成卿『農村自救論』、一五四頁

第二章　農本主義批判と反批判

第一節　マルクス主義の農本主義批判、農村社会学批判

第一項　マルクス主義の農本主義批判

マルクス主義の農本主義批判となると、桜井武雄を取り上げなければならない。既に触れたように、桜井が農本主義を全面的に批判したのは、その現状肯定主義が社会革命上、極めて有害であると判断していたからである。そこで、批判点を具体的に検討してみることにする。まず、桜井は、老農農本主義を批判している。批判の対象となったのは、中村直三、岩谷九十老、小柳津勝五郎、そして二宮尊徳である。中村と岩谷に関しては、彼等が百姓一揆をとり鎮め、権力のための「屈強の防塞設定の役割を演じた」ことを非難している。岩谷については、本論文では検討していないので、何とも言えないが、中村直三については、第一章第二節第二項「老農と農民一揆」において、検討を加えている。筆者の結論は、中村直三の一揆鎮静化が、権力擁護の証拠にはならないということである。小柳の「天理農法」(燻炭栽培法)については、マックス・フェスカなどが焼土肥料を分析実験し、肥料として全然無力であることを明らかにしたと指摘している。その天理農法が、大日本皇道会に用いられたのは、零細農耕制のもとでは、欧米の近代農法を活用する基礎条件がなく、無力な老農農法が珍重されたのだと論じている。老農農法が非科学的なものであるのか否かを論ずることは、筆者の課題ではないが、稲作技術に関しては、その蓄積のない欧米農法もまた、日本風土への適用という点において、問題を多く抱えていたことがうかがわれる。そして、二宮尊徳については、桜井武雄『日本農本主義』において独自の章を設けて検討しているが、批判は、専ら、報徳主義の勤倹貯蓄の精神が、自力更生政策に利用されているという点に向けられている。二宮尊徳自体については、例えば、生家にしても、伝えられるほど質素なものではないこと、また、田地を河川氾濫で流亡させたことも、悲惨なことと言うよりも、それ

によって土地緊縛から自由となり、過酷な貢納義務から逃れたのであって、好運なことであったと解釈している。また、三一歳まで結婚しなかったのは、一家を構えて独立すると、頁租義務が生ずるからだと指摘している。結局、二宮尊徳は、ずる賢く立ち回り、小作料を蓄財した利殖家として描かれるのである。地主として小作料を取っていたことは事実であり、本論文においても、その点に、二宮の寄生性を指摘した。しかし、筆者は、それをもって、二宮の老農農本主義が無価値であるとは言えないと考えている。

それでは、桜井の官僚農本主義批判はどういうものか。桜井は、官僚農本主義の本質が、西郷従道の「済急趣意書」に露呈していると見ている。すなわち、労力の度を増し、貯蓄の法を設けさせようとするものであり、封建時代の農奴制約令と同じだと非難するのである。そのような側面が、官僚農本主義に存在することは、事実であろう。但し、農本主義における勤労主義が、すべて滅私奉公的勤労を意味しているわけではないことは、既に述べている。また、岡田温の官僚農本主義に対する批判としては、「岡田氏の眼には農村の現実がちょうど逆にうつっている(1)」として、岡田が窮乏した現実の家族経営農業を安定したものと描く欺瞞性を非難している。そして、岡田の議論を、「資本主義の害悪さえなかったなら今日の如き農村窮乏はなかったであろう、平和な『小農』の世界を荒した元凶は資本主義だといふわけである(2)」と整理するのである。桜井は、資本主義が安定しているはずの小農を窮乏化させたのではなく、窮乏化した零細農耕を資本主義が利用していると見ていたのである。

社会運動農本主義や教学農本主義に対する桜井の批判はどうであろうか。桜井は、橘孝三郎が守ろうとしようとしたのは貧農ではなく、没落しつつある中小地主と中堅自作農であると非難している。例えば、茨城農工銀行が中小地主の抵当流れの土地の競売処分を行おうとしたとき、橘(愛郷自治連盟)が茨城県所有の銀行株を町村に分割させて町村長を株主にし、競売処分を阻止しようとしたことを持ち出す。橘こそ、貧しい農民の立場に立っていないということである。しかし、橘の「家族的独立小農」は、理論上、平均的農家像であって、中小地主をさすものではない。この「家族的独立小農」を、桜井は、空想と考えるが、その空想のなかに、小作貧農を入れて、小農の優越性を強調することで、小作貧農まで優越するものと描き、それを美化することになると非難するのである。しかし、「家族的独立小農」は、標準耕作規模一町五反歩を想定しており、小作貧農を含めていたとは考え難いのではないかと思われる。いずれにせよ、桜井が、ミゼラブルな現状を美化するのが農本主義だと考えることには、疑問も生ずる。確かに、困窮しているのに、困窮していないと主張するのは欺瞞であるが、橘も、岡田も、困窮する農家の現実を、それでいいのだと考えていたわけではないのである。小農を優れたものと考えることは、

小農擁護を求める動機になると考えることもできるのである。これに対して、桜井は、社会政策学会において、福田徳蔵が、農家救済の道は資本主義の洗礼にあるとして、それによって小農が減少しても、それは喜ぶべきことであるという大農論を展開したことを、積極的に評価していた。勿論、福田の議論がブルジョア的見地からなされていることを批判した上でのことではあるが、講座派の桜井には、資本主義的農業の発展を積極的に評価する視点が含まれているのである。桜井が、小農の没落を望んだとは考え難いが、論理上、楽観論が漂うことになるのである。なお、桜井の先の認識、すなわち、橘は、貧農ではなく中小地主を守ろうとしているという認識を逆から見れば、貧農にとって中小地主の没落が望ましいということになろう。寄生地主はともかくとして、中小地主への敵対的評価は、マルクス主義農民運動を狭めるものであったと思われる。

また、加藤完治については、「日本農民魂鍛錬陶冶を一切とし皇国農民精神を宣揚することによって、農業技術の改善や農業経営の合理化をいかにすべきかという、最も肝心な且つ困難な問題を回避した(3)」と非難する。加藤に精神主義的傾向のあったことは事実であるが、しかし、農事改良は、例えば、荘内地方の鳥海農民道場においても、また加藤自身においても、絶えず追求されたことであり、そこにこそ加藤が勤労農民に支持される重要な根拠があったのである。さらに、桜井は、「いはらき」新聞に載った日本国民高等学校の生徒数名の転向事件や、「河北新報」に載った秋田県立青年修練農場における帰宅事件などを引き合いに、農民道場における指導・経営方針の問題と、加藤の人格上の問題を挙げている。生徒たちの主張は、学んだことは役に立たず、奴隷のようにただ働きをさせられ、「加藤校長も農民の慈父の如く思はれてゐるがその反対でインチキだ(4)」というものである。加藤からすれば、教えても分からず、厳しくすればいやがる、できの悪い弟子のいうことにすぎないであろう。しかし、桜井からすれば、農業の役に立たない皇国農民思想をスパルタ式に詰め込み、いやがる生徒を非民主的に拘束し、高い学費を取る営利主義だということになる。このような感情的対立をも伴って、加藤と桜井はすれ違うのである。

ところで、筆者が整理した農本主義の五つの特徴について、マルクス主義はどう考えるのか。まず、第一の農業主義、すなわち、農業労働の意義についてであるが、マルクス主義は、変革主体形成における労働の役割に注目するが、農業労働の意義がその役割上、特別であるとは考えないであろう。むしろ、資本の文明化作用といった側面に注目するのであり、農本主義とは、まったく異なった視点に立っているわけである。第二の小農主義については、マルクス主義は、零細農耕を固定化して、ミゼラブルな現状を肯定する考え方であると見ていることは、言うまでもない。第三の家族主義、すなわち、家族は倫理的に崇高なものであるという考え方について

は、マルクス主義は、眼前の農家が倫理的崇高性を示す余裕などないミゼラブルなものであること、そこで培われる「心」・「情」は、天皇制支配に呼応するものに他ならないこと、を指摘することになると考えられる。第四の勤労主義についても、現にある零細で劣悪な農業条件下で頑張れという考え方として、現状肯定的かつ保守的な考え方であると捉えるであろう。マルクス主義は、労働を、自己実現と疎外の二重の視点で捉えるが、農本主義の勤労主義については、労働生産性より土地生産性を重視し、労働の代価を求めない無償労働的な考え方と見るであろう。それは、権利意識の未熟なものと理解され、国家や資本への奉仕精神と理解されるのである。しかし、勤労性は、もっと農民生活に内在して理解される必要があると思われる。

それにしても、マルクス主義は、農民的思想と行動をどう理解するのであろうか。労農派的発想からすれば、農民的思想・行動とは資本主義的思想・行動の一つであり、小資本家的性格をさすことになろう。他方、講座派的発想からすれば、農民的思想・行動とは資本主義的思想・行動に還元できない半封建的思想・行動であり、小作農的性格をさすことになろう。しかし、マルクス主義においては、小資本家的性格と小作農的性格は、結局、小ブルジョア的性格であり、そこに、衝動性、動揺性、急進性、空想性などが暗黙のうちに想定されてしまうことは既に述べた。こうした発想に立てば、農民的思想・行動に歴史創造性を認めることは困難となるのである。しかし、労農同盟論上、勤労農民がその対象とされる根拠として、①搾取されている点、②搾取していない点、③勤労者である点、が重視されていたことを想起する必要がある。とくに農民の勤労性の研究を深めることは、マルクス主義にとって、農民的思想・行動のリアリティに接近する糸口になるものと思われる。

註

(1)桜井武雄『日本農本主義』、白揚社、一九三〇年、四一頁
(2)桜井武雄『日本農本主義』、四二頁
(3)桜井武雄『日本農本主義』、一二二頁
(4)桜井武雄『日本農本主義』、一二四頁

第二項　マルクス主義の農村社会学批判

桜井は、権藤成卿と橘孝三郎の農本主義を、「非常時の農村社会学のファッショ形態(1)」と見ていた。したがって、農本主義批判は、農村社会学批判でもあったのである。桜井の農村社会学批判は、「農村社会学批判」(『人物評論』第二年、第二号、河出書房、一九三三年)、さらに「農村の弁証法 ― 農村社会学批判の課題」(『唯物論研究』一七号、一九三四年)に示されている。「農村社会学批判」は伏字が多すぎるが、内容の要点を列挙すれば、次のようになる。なお、ここでは、

桜井の批判を見ておくにとどめる。

①村・村落・部落は政策の重点であり、農村社会学は理論的にそれを担うものである。

②農村社会学は封建的零細農耕の建て直しを図ることで、それを基礎基盤とする日本資本主義に貢献するものである。

③農村社会学は、資本主義

の侵入によって引き起こされた問題を、ひたすら都市対農村、都会対田舎の関係に還元し、没落する中小農を復古主義の夢幻のうちに麻痺せしめようとするものである。

④農村社会学の牧歌時代は終わり、非常時の農村社会学がでてくる。農村社会学者は、農村計画樹立実行運動へ参与することになる。

⑤非常時農村社会学のファッショ形態が、権藤と橘である。

「農村の弁証法」の要点も列挙しておく。

①マルクス主義も、上層建築と下層建築の交互関係において全面的に追跡することなしに、現実の農村の姿とその見通しの把握は困難となった。

②農民大衆の不安、急進化に対し、ブルジョアジーは従来の方法では自己の側に確保できなくなったため、社会フアッシスト的方法に移った。

③ブルジョア農村社会学は「何と平和に、牧歌的な田園の姿」を描くのか。農本主義者も同じである。

④アメリカは農場中心の田舎、日本は小農家による村落、といった議論は、外見上の差異を経済的本質との関連で考察しない、皮相的見解である。どちらも資本支配のもとで悩むという、矛盾の本質において同一である。

⑤都市と農村の生活様式を区別する議論は、農村を一つの独立的存在とみなし、資本主義という「統一物における差別」として把握されない。形式論理的概念における農村一般となっている。だから、外形的差異、農村における「人と人との一般的関係」、「職業、地位、階級の種々なる関係」、「集団、共同体」などに視野が局限される。

⑥史的唯物論は、農村を歴史性において把握し、資本主義社会における都市との対立物としての弁証法的把握における農村を捉える。

また、山崎謙も、「土田杏村批判」(『唯物論研究』一八号、一九三四年)において、土田杏村を批判している。山崎は土田の主張点を「マルクス主義の誤謬は、今日のこの国民主義的感情に服従せぬところにあり(2)」ということだと要約し、「こんな近代科学があってたまるもんじゃない(3)」と言う。その理由は明記されないが、感情に服従しては客観的科学は成り立たないということであろう。山崎の土田批判は、新カント学派のリッケルト批判でもあるが、その「リッケルトにあっては、判断を決定する最後のものは直証判断と名づけられる一種の感情である(4)」と言う。これに対し「感情にしても意志にしても、それが意識であるかぎりは、知識を基礎とする(5)」と言う。知識とは、「すでに知られた存在」に対する知識であるとして、存在の規定性というマルクス主義の原則を指摘する。それ以上のことはないが、最後を「土田氏のごときひとをつまらなく反動の逆浪に漂わせて置くのを惜しいと思う(6)」と結んだことが印象的である。山崎の土田批判には、嘲笑的なものさえ感じられるのに、最後に土田を持ち上げている。これは、山崎自身が、土田批判を、どこか紋切り型であると感じながら、原理原則を主張していたのではないかとうかがわせるものがある。

註

(1)桜井武雄「農村社会学批判」、『人物評論』第二年第二号、河出書房、一二頁

(2)～(3)山崎謙「土田杏村批判」、『唯物論研究』一八号、一九三四年、一三五頁

(4)山崎謙「土田杏村批判」、『唯物論研究』一八号、一四〇頁

(5)山崎謙「土田杏村批判」、『唯物論研究』一八号、一四一頁

(6)山崎謙「土田杏村批判」、『唯物論研究』一八号、一四二頁

第二節　農本主義、農村社会学におけるマルクス主義批判

第一項　農本主義のマルクス主義批判 ― 橘孝三郎、加藤完治

橘孝三郎は、「生産二次性原理」の視点から、農業と工業の本質的な差異を指摘していた。それは、農業における「種の生命力」の重視であり、そこから「近代機械工業方法」が農業全面を被うことは不可能であると考えるのである。橘は、それを生産形態の差異に結び付ける。すなわち、農業生産には「家族的独立小農」が、工業生産には資本主義的経営が適合的であると見る。論理的には、資本主義的経営による生命力重視型農業生産、および家族経営による近代機械工業生産も考えられるが、そうした形態は展開しないと考えるのである。こうして、小農形態が農業の本質に適合的であると考え、そうした視点からマルクス主義批判を行っている。その批判点を要約的に列挙すれば、以下の通りである。

①マルクスは農業の本質を理解せず、農民の立場に立たない

橘は、マルクスが、小農の存続を農業の未発達性に求め、資本主義の発展に伴い、小農は滅亡するほかないと考えていたと見る。だから、マルクスは農民的立場に立っていないと言うのである。そして、日本では、農業の工業化、農民の労働者化がが本格化しなかったとして、その状態が自然だと考える。橘にとって、農業の資本主義化は農業革命などではなく、農業破壊そのものであった。しかし、マルクス主義が農民層分解を望んでいたと見るのは、誤解であろう。ここでマルクスの労農同

盟論を検討する余裕はないが、小農のままでの労働者との同盟を否定していない。そもそも、日本における小農の分解は地主制と資本主義がもたらすものであり、桜井にしても、農民層分解が不可避だとは考えても、小農存続がよくないと考えたわけではないであろう。

②マルクスは物質主義的であり、資本主義の考え方の延長線上にある(6)。

橘から見ると、マルクスの考え方と資本主義の考え方は根が同じである。橘は「資本主義的物質文明の西洋及北米的成熟」は「病態社会の典型」であると言うが、ここには、西洋的物質文明対東洋的精神文化といった対比的理解がある。この視点から見れば、マルクスも唯物論である以上物質主義であって、資本主義も物質至上主義である。それ故、橘は、マルクス主義を資本主義的な物質至上主義の考え方の延長線上で展開されたものと見るのである。

③マルクス主義は西洋流の見方であり、日本の農村はそれでは理解できない

橘は、マルクス主義の階級論が西洋流の物の見方であって、日本に直ちに適用できないのに適用していると見て、「我々は理屈で現実をしばり殺してしまうようなことをしてはなりません」(「愛国革新本義」)と言う。このような、マルクス社会理論は西洋の考え方であり、それでは日本の農村は理解できないという議論は、農村社会学においても、広く支持されていたのである。

④社会主義は労働者中心であり、農民が位置づけられない

橘にとって、搾取のない社会とは、労働者が中心の社会主義社会ではなく、農民が中心の共同体社会でなければならなかった。それは、「農工二者の生産組織の全体内に取り入れられたる有機的結合」であり、農民中心の理想社会であった。だから、労働者中心の社会を求めるマルクス主義を、橘は容認できないのである。

⑤具体的労働を人間労働一般に還元するのは、生産二次性原理上容認できない

橘は、「百姓の労働も賃金労働者の労働も社会的平均労力による労働なぞといふ事は何を根拠として呼ばれ得るものであらうか(1)」として、個別具体的労働を人間労働一般に還元する考え方を批判している。「生産二次性原理」を主張する橘にとっては、「百姓の労働」と「賃金労働者の労働」は、まったく異質のものであった。それを同一視するのでは、農業・農村の貧困を捉えることはできないと考えるのである。マルクスが抽象労働を想定するのは、論理上のことであり、「百姓の労働」と「賃金労働者の労働」が同じだと主張したわけではない。『資本論』の世界は、いわば現象の世界を超えた本質の世界である。それを、具体的現象を捉える感覚で推し量ろうとするところに、橘の誤解が生じるのである。

⑥貨幣の資本転化を阻止するのが、小経営社会であることを理解しない

橘は、「貨幣の資本転化は商品流通がない場合には起こり得ないものである。即ち人々が使用価値のみを目的として生産に従事しておる限りに於て資本という存在

は経済現象内に客観化されるものではない(2)」と指摘していた。「使用価値のみを目的として生産に従事しておる」のが、橘の言う「家族的独立小農」であり、そこに貨幣の資本転化阻止を求めたのである。これは、マルクス主義から見れば、小ブルジョア的空想に他ならない。

⑦資本主義止揚の力が農業・農民にあることを理解しない

橘は、土百姓を歴史創造群と考えており、土百姓に資本主義を乗り越える力を見いだそうとしていた。しかし、マルクスは、労働者階級の解放を主眼とする。それ故、橘は、マルクス理論を非農民的理論であると考えるのである。

⑧農業の種類の違いが、理論構成上考慮されていない

橘は、イギリス農業が日本農業と異なって小農の駆逐というコースをある程度辿った理由を、農業の差異に求める。すなわち、橘は、日本の「水田主穀農業」とイギリスの「有畜農業」の性格は異なると考え、有畜農業だから資本主義化が進行すると考える。こうして、マルクス主義は「水田主穀農業」に資本主義化を機械的に当てはめようとする、と批判するのである。

⑨日本農業には資本主義的農業が展開していない

橘は、日本の地主は資本家でなく、小作人は賃金労働者ではないことを強調し、「水田主穀農業」の場合、マルクスの主張するような経済的進化の法則を辿らないと考えるのである。

こうして見ると、橘のマルクス主義批判は、農業の資本主義化(＝農民層分解)を歴史的必然と捉え、そうした事態を楽天的に見る立場に向けられていることが分かる。橘は「農業も工業のやうに機械化的革命を受けるのものであり、且つ受けねばならんものであるかのように解釈され」るのは、「単なる誤謬ではなくて最も危険な性質を帯び」ていると言う(3)。この「誤謬」を説明するため、マルクスの生い立ちまで持ち出す。すなわち、「弁護士の家に生まれてそのまゝ一生を都市的空気の中に育ち、徹頭徹尾唯物的主智主義のそれによつて養はれたる彼がどうしてロンドンに於て或はまたパリーに於て農村の本質を把握する機会と可能性が与へられやうか。……マルクスの眼中には、ブルジョアとプロレタリア外なかつたのだ。本質的に申すならば彼の脳裏には工場と工場と工場都市とそれをとりまく市場経済現象外映らなかつたと申し得る。即ち彼が農村をながめた場合彼は市民の眼、市民の精神を以てしたので農民のそれではない(4)」ことを強調する。土百姓を歴史想像群と見る橘は、資本主義止揚の基本的な力をも勤労農民に求めていたのである。こうして、橘から見ると、マルクス主義は、資本主義の発展に伴って機械化されない小農が機械化された大農に駆逐され、小農は滅亡するほかないと主張する理論であった。例えば、桜井武雄にも、資本主義的農業を肯定的に見る視点が含まれていた。そうしたことが、橘には、マルクス主義が資本主義的農業経営への転換を望んでい

ると見えるのであり、地主の立場には立たないが勤労農民の立場にも立たず、農本主義の敵である資本主義の立場に立っているとさえ見えるのである。

また、加藤完治は、「今の労働運動は労働運動でなく、労働嫌いの人が集まって騒ぎまわるのだから、非労働運動であります(5)」と労働運動を批判していた。加藤も、労働を日常生活次元で理解し、労働運動とは勤労を奨励する運動であると捉えたのである。さらに小作争議に言及し、「村に労働忌避の始末におえぬ奴がいて真面目に働いている人をおだて上げて小作争議を起す場合があるゆえに各人は大和民族本来の理想信仰の下に労働は神聖なりという旗印をふりかざして真面目に農業をしながら信ずるところをやるのが良いと思う。私も将来真の労働運動をやるつもりである。窃盗のような社会主義者、乞食のような救世軍式の人間、要するに真の労働を嫌う人間を改造せんがために駑馬に鞭打って同志と共に大和民族の理想信仰の徹底に努力したい(6)」と言う。こうして、「労働嫌いな人」、「労働忌避の始末におえぬ奴」、「窃盗のような社会主義者」、「乞食のような救世軍式の人間」が、マルクス主義者だと言うのである。「窃盗」や「乞食」という表現は、自分は勤労せず、他者の勤労が生んだ生産物に依存する姿勢をさし、「労働嫌い」(＝「労働忌避」)の姿勢をさしている。マルクス主義から見れば、それこそが搾取者としての資本家階級の本質であったが、勤労を重視する加藤から見れば、社会運動家も同様であった。そもそも、加藤は、階級闘争を、共同体破壊の行為だと考えていたのである。農民組合運動の小作争議を批判するのも、部落の融和を重視するからであった。

註

(1)橘孝三郎『農業本質論』、建設社、一九三二年、一一〇頁
(2)橘孝三郎『農業本質論』、一一五頁
(3)橘孝三郎『農村学前編』、三二頁
(4)橘孝三郎『農村学前編』、六九頁
(5)『加藤完治全集』第四巻、一一四頁
(6)『加藤完治全集』第四巻、一二〇頁

第二項　農村社会学のマルクス主義批判 ――土田杏村、井森陸平

土田杏村『農村問題の社会学的基礎』(一九二八)は、岡田温の『農村更生の原理と計画』(一九三三)に理論的影響を与えていたように、土田も反都市主義論者として、農本主義と親近的であると考えられる。この土田も、『思想問題』(一九二八九)において、マルクス主義批判を展開していた。また、日本農村社会学の形成期を代表する一人である井森陸平も、『形式社会学研究』(一九二七)において、「マ

ルクス社会学」(プハーリンが念頭にある)を批判していた。それらに見る主な批判点は、次の通りである。なお、本論文は、その主張が妥当であるか否かを検討しようとするものではない。なぜ、異なった見解になるのかが問題なのである。

土田杏村のマルクス主義批判は、以下の通りである。

①「社会的法則は自然科学的法則の如く絶対の確実性を主張しない(1)」にも関わらず、「マルクス主義者の中には、地球を支配する必然性も社会を支配する必然性も、必然性としては全く同一であり、その確実さは絶対のものだなどと考へて居るものがある(2)」。

②「法則は社会の歴史の或る区切られた時代の間をだけ支配するのであって、社会の全歴史的経過を支配しない(3)」にも関わらず、「総じてマルクス主義者は、社会科学の法則の必然性を絶対的のものと思ひ、なおその支配する範囲をも全歴史的経過を通じて永遠的のものと考える点で誤ることが多い(4)」。

③「マルクス主義者は理想的な見方を排斥するけれども、彼らの言動は一々に熱烈な理想を含んでゐるではないか(5)」として、理想意識を排除し、すべてを存在の一元に帰せしめて社会を観察する態度、理想主義的努力を排斥する不思議さを指摘し、マルクス主義者こそ熱烈な理想主義者であると指摘している。なお、土田は、「マルクスが、理想主義を排斥して一元的に社会科学的社会変化論を主張したことには、意味があつた(6)」とも述べており、「必然論と理想主義との結合」を求めるのである。

④「マルクス主義者は、一方では、社会は必然の法則に随つて云々の方向に推移変化すると称しながら、他方では、その方向に社会を動かす様に熱心に骨を折って居る。何といふ自信のない主張であるか(7)」。

⑤「マルクス主義者は、相変わらず観念論を一からげにして素朴観念論の意味のものにし、これに攻撃の悪口を吐いている(8)」が、「外界の世界の厳然たる存在を其侭に容認するけれども、その外的世界の現象がその如く現れているに就いては、何等か認識主観のがはより参与するものがあると主張する(9)」先験的観念論もある。マルクス主義者が観念論を批判するなら、もっと観念論がどのように発展しているかを研究すべきである、と指摘する。

⑥「個々の現象を分析解剖すれば、そこには自己矛盾の弁証法的構造が証明せられるかも知れない。併し知り得たものは、個々の具体的現象についてである。然るにマルクス主義者は、すべての現象がさうした構造を持つてゐるといふ。斯く僅かに個々の現象について知り得た知識を拡大して、全部の現象が本来さうした構造を持つてゐるとする根拠は何処にあるか(10)」。

⑦「唯物弁証法に随うならば、我々の思想はすべて物質的基礎の上に成立したもの(11)」であり、物質的基礎の変化に伴い、「唯物弁証法も亦、何等か他の思想に転

化しなければならぬ(12)」。これは、「唯物弁証法は絶対的真だと主張する権利を持たないと言って居ることだ。唯物弁証法は、これを強く主張すれば主張するほど、自己を破壊してゐる(13)」。

⑧「唯物弁証法を極端に拡張せしめて、一々の自然科学的研究をその様式に適するやうに拘束するのは、我々より見れば理論だほれであり、しかも一種の専制的態度である(14)」。

⑨「マルクスが弁証法的の飛躍を考えたことは興味の深い(15)」ことであり、自己矛盾を起こして対立する二つの原理より他の原理へ移るのは突然の変化であり漸次的推移ではない、というのは正しいが、「それは意味の上のことであつて事実の上のことではない(16)」。

⑩「人間の意識が人間の社会的存在を決定し得ないといふことは、言い過ぎであつて眞ではない(17)」。

⑪マルクスの資本主義社会解剖は、楽天的に過ぎるのであり、資本主義の発展は、マルクスの予想しなかった特色をもたらした。「資本主義社会の発達の新しい様相」は、「生産が社会の全支配をなすのではなくて、信用がそれの地位を奪つた(18)」ことである。「即ち資本家と労働者とを併せた生産者階級に対して金貸階級が対立(19)」しており、「資本主義の名はもはや適当でなく、信用主義の名が適当(20)」である。「金融資本主義は資本主義の末期の段階に相当するといふことは事実に合致せず、寧ろそこに新資本主義が発芽しつつあつた(21)」。

井森陸平のマルクス主義批判は、以下の通りである。

①「社会現象の全体を研究対象となすのはその立場たる実証主義の方法と相容れないものである。何んとなれば実証的帰納法が十分に適応せられ得るためには対象は限定せられたるものでなければならないのであって余りに包括的なる対象には十分に適応せられ得ない(22)」。

②「因果関係的方法のみが思惟し得られるとなす(23)」が、「目的観的方法に対立する科学的方法としては因果関係的方法以外に、因果的関係を問題とせざる分析的記述、理解法が存する(24)」。因果関係を問題にする場合も、、原因・結果ではなく、相互関係の概念で分析すべきである。

③ヘーゲルの影響がある以上、目的論的運命論的分子を含まざるを得ない。だから、実在認識の態度においても形而上学的であり、特定の部分内容にのみ妥当する相対的な法則の発見をもって、すべてに妥当する法則とみなす。これは、「実在に対する学的認識の可能及びその認識結果の妥当の限界を考慮せざる無批判論に陥れるものである(25)」。

④学問はある特殊な社会階級のためにのみ局限せらるべきではなくして、社会全体のために役立つべきものである。しかし、マルク士主義は、「或る社会階級の上に

立脚してこの階級本位の理論を立てゝゐること(26)」が問題である。「なんとなれば社会主義社会に於いては社会組織は集中的大規模組織なるを以て個人所属の集団が拡大し随ひて集団の個人に及す威圧が減衰し之が補充として集団生活規律の強さ客観化の程度が増大すべきこととなり、斯る社会主義社会に於ける集中的組織の必然的結果たる社会規律の強さ、客観化の程度の増大と、生産関係の変改に因る個人の社会規律を進んで肯定する意識の発生とそのいずれが優勢なるかは直ちに解決せらるべき問題ではない(27)」と主張している。

⑤「社会主義社会に於いては、政治的力としての強制組織は特殊の社会階級の利益のために働くことを止めるという主張は一面の真理はあるが全然肯定せらるべきものではな(28)」く、「反対に生産手段の分配の不平等に基く階級の存立を覆し得たる政治手段は、其現実の支持者が公正なる神にあらずして向上心、力への欲望に富める人間集団であるが故に、再び一部の集団の利益のために利用せられるに至るであろう(29)」。

⑥「レーニンの国家消滅観の内容をなす所の生産関係の変改によつて社会生活の規律に対する個人の服従意識の増大の結果強制機関としての国家が消滅するといふ論も亦問題なきを得ない(30)」。

⑦「レーニンの社会主義社会に於ては社会一般に関する事柄を遂行する特定の機関、役人階級が消滅すると言ふのは分業の法則を無視するものであつてその計画的産業経営と矛盾するものである(31)」。

こうした土田や井森のマルクス主義批判には、橘のそれと同様に、マルクス理論に対する誤解があるが、ここで重要なことは、彼等が、先に橘で指摘したような、マルクス理論の現象的把握をしていたことである。土田が、社会法則を歴史主義的に把握し、その絶対性を否定し、観念、主観の働きを重視するのは、相反する事実が並存する個別具体的現象の世界において、社会法則が絶対ではなく、観念、主観の差異によって、人々が、現実的に異なった行為を行うからであろう。例えば、土田は、経済が意識を規定することを、「会社や銀行から解雇されたら、万事は休するのだ。その最大危険事をまで侵して自分の意志を通すのは、容易のことではない(32)」という具合いに、具体的現象として捉えようとするのである。また、井森が、マルクス主義の対象の包括性を批判し、理解法を重視し、国家論を具体的に捉えようとするのも、個別具体的現象の実証を重視する農村社会学者らしいことなのである。しかし、実は、先に述べたように、日常生活次元においては、相反する多様な社会事象が発生しているのである。だから、橘や土田や井森のような現実感覚で社会事象を捉えていけば、マルクス理論と合致しない事実を、いくらでも見いだすことができるのである。相反する多様な社会事象の総和のなかで見えてくる本質の世界、それが、マルクス主義の世界である。とはいえ、日常生活次元で理解されない

と、どんな理論も支持されない。したがって、土田が、「道徳的の標語に対しては、日本人は其れにより大いに動かされる良心を殆ど本能的に持つてはいる(33)」が、「日本人は科学的標語に対して動かされることが無く、時とすれば其れに反感を持つことさへある(34)」と指摘したことは、重要であろう。こうしたなかで、労働組合運動が混乱すると、「伊太利のフアッショ運動に類似した、情熱的なる国民的道徳的社会運動が起こり、其の専制的勢力が圧倒的にすべてを統一するかも知れない(35)」と指摘する。こうして、「皇室中心主義、国家主義、国民主義など呼んで、其中には何等かの道徳的意義を含む如く聞こえる主義を標語として取る時、其の運動に一般民衆は感情的に多くの同意を持つ(36)」と指摘したことは、注目に値することである。

以上のように、農本主義や農村社会学におけるマルクス理解を検討すると、そこに誤解も指摘できる。しかし、彼らは日常生活次元で考えるため、「事実がこうだ」といった確固たる自信に裏打ちされている。他方、マルクス主義からすれば、日常生活次元の事実とは疎外された事実を含むものである。例えば、個別具体的には、労働者の立場に立つ資本家も存在するであろう。しかし、そこから、資本家は労働者の立場に立つことを本質とする存在である、と結論付けることはできない。このように、日常の事実が疎外された事実であるなら、それは疎外された思考(科学)で矛盾なく捉えられることになる。それ故、農本主義が農民の日常生活感覚を捉えて説明しているとすれば、それは農本主義が疎外された思考であることを示す、と捉えられる。マルクス主義は、日常性を超えた次元に、その本領を発揮する世界があるのである。しかし、疎外されていることも、日常生活次元で明示化できなければ、共感を得ることはできないであろう。桜井にも、山崎にも、そのような日常生活次元で明示化しようとする努力が欠落しており、さらに言えば、批判にまともに答える態度が欠落していたのではないか。そこに、紋切型の教条主義があったのではないか、と思えてならない。戦前の思想弾圧という不幸な状況下で、彼らの相互批判は、残念ながら、学問論議ではなく、イデオロギー論議となってしまった。桜井の農本主義批判にも、そのような限界がある。桜井の農本主義に対する価値的態度が、桜井の農本主義研究の内容自体をも制約している可能性に、注意する必要があるのである。

註

(1)～(2)土田杏村『思想問題』、時事問題講座九、日本評論社、一九二九年、一二八頁

(3)土田杏村『思想問題』、一二八頁

(4)土田杏村『思想問題』、一二九頁

(5)土田杏村『思想問題』、一三四頁

(6)土田杏村『思想問題』、一三九頁

(7)土田杏村『思想問題』、一三六～一三七頁

(8)土田杏村『思想問題』、一六三頁

(9)土田杏村『思想問題』、一六一頁

(10)土田杏村『思想問題』、一九五頁

(11)～(13)土田杏村『思想問題』、一九七頁

(14)土田杏村『思想問題』、二〇〇～二〇一頁

(15)土田杏村『思想問題』、二〇一頁

(16)土田杏村『思想問題』、二〇二頁

(17)土田杏村『思想問題』、二一五頁

(18)土田杏村『思想問題』、二一八頁

(19)～(21)土田杏村『思想問題』、二一九頁

(22)井森陸平『形式社会学研究』、甲子社書房、一九二七年、九二～九三頁

(23)～(24)井森陸平『形式社会学研究』、九三頁

(25)井森陸平『形式社会学研究』、九五頁

(26)～(27)井森陸平『形式社会学研究』、二七五頁。

(28)～(29)井森陸平『形式社会学研究』、二七四頁

(30)井森陸平『形式社会学研究』、二七五頁

(31)井森陸平『形式社会学研究』、二七六頁

(32)土田杏村『思想問題』、二一四頁

(33)～(34)土田杏村『農村問題の社会学的基礎』、ロゴス書院、一九二八年、一一八頁

(35)～(36)土田杏村『農村問題の社会学的基礎』、一一九頁

結論　日本農本主義の全体構造

農本主義を「構造」として捉えようとすると、まず、その土台が問題になるだろう。農本主義は、武士、地主、商人、賃金労働者、資本家、官僚、農民組合運動家などの考え方ではない。農本主義は、農村社会における耕作農家の生産と生活の歴史のなかから共有されるようになってきたところの、耕作農民の〈心性〉である。それは、大地、大自然に立ち向かうところから生ずる一つの〈心持ち〉に他ならない。農本主義における自然と人間の関わりに関する考え方としては、本論文においては、①自然優位主義(権藤成卿、橘孝三郎、山崎延吉、石原莞爾派、岡田温)、②共存主義(加藤完治、菅原兵治)、③人間優位主義(二宮尊徳、中村直三、石川理紀之助)が見られることを論じたが、耕作農民はどうなのであろうか。一概には言え

ないであろうが、山形県飽海郡豊原村の丹蔵家の若勢からその当主となった伊藤善治の明治二六年から昭和九年までの日記である『善治日誌』には、平凡な耕作農民が、毎日の天気の変化にいつも注意を向けていたことが示されている。決して、優しい自然に包まれている感覚ではないのである。また、『善治日誌』を分析した川口諦は、「四～五月の耕耘と、六月の田植えと、七月の草取りと、九月の稲刈り、さらに一一月の秋耕等々というように、二〇種をこえる様々の作業種類が同一個人によって順次に継起的に、時間的分業に結び合わされて稲作作業の一全体を構成している(1)」ことを指摘している。このように、農村生活は季節循環を基礎に構成されており、「善治の二〇歳代の行動種類の型と五〇歳代のそれとの間に基本的に変化がない(2)」のであった。だから、「善治の日常生活はきわめて安定した型を保って繰り返されてきたといえる(3)」のである。しかし、これは、必ずしも、耕作農民の日常生活が、進歩工夫のない同じことの単調な反復であることを意味しないであろう。同じく『善治日誌』を基に、武田勉は、「丹蔵家は、米の『買出し』を中心にして、米の賃搗き、縄の仲買い、さらに酒小売り等を、手広く営む在村商人であった(4)」ことを分析している。このように、農家副業をも組み合わせて、全体として無駄のない労力配分を工夫しているのであり、自然に対しても、創意工夫をもって立ち向かっていたと考えられる。その限りでは、耕作農民の感覚を最も忠実に反映したのは、老農農本主義であった。しかし、自然に包まれるのか、自然と共存するのか、自然に立ち向かうのか、という自然観の違いはあっても、耕作農民の日常生活におけるものの見方や考え方を反映する点においては、農本主義は共通している。川口は、「善治の ― そして村の百姓たちの ― 自給自足・自活への強い執念(5)」を指摘し、さらに、「一定の未来の表象にむけての現在の意味づけ、そして自分の経営・消費・生産についての自己規制、その実践としての一定の目的意識的な作為の不断の反復、これが平凡ともみえる小農民の日常生活の主体的な中味であろう(6)」と指摘している。また、善治は「金銭に細かかった」が、それは「日常的に一日一日を計算しておろそかにしない自覚された自己規制的行動(7)」であったのである。ここに示された善治の行為様式を、個人的な特質、あるいは荘内的特質と見る議論もあるであろうが、筆者は、耕作農民に共通するものであると考えている。この自己規制は、祖先の財を減らさず、子孫のために財を残してやるという家論理の中にも示されるのであり、石川理紀之助において指摘した耕作農民の〈時間幅を長期に取った判断〉、〈生産や生活の全局面を考慮した判断〉、〈村落内における非競争原理〉、〈待ちの思想〉などとなって、農民的行為様式を構成していると考えられるのである。

農本主義は、こうした耕作農民の自己規制の〈心性〉を基礎構造として、その応用構造が構成されることになる。綱澤満昭が農本主義から分離した土着思想とは、

農本主義の基礎構造なのである。老農農本主義は、この耕作農民の自己規制を、勤労や節倹として明示化し、共通の自己規制を求める者同士の共同と連帯をもって、生活の自衛、自立を図ろうとしたのである。教学農本主義は、この耕作農民の自己規制を農民道や農士道として道徳化し、さらに、それを国家意識や日本精神などに結び付け、天皇制国家と耕作農民の調和を図ろうとしたのである。官僚農本主義は、保守官僚農本主義として老農農本主義を農政に取り込み、老農を通して、耕作農民の自己規制を社会秩序維持の手段として活用し、老農の力を、農政の遂行・浸透の力として活用しようとしたのである。地主制の進展とともに、保守官僚農本主義は地主擁護的となった。これに対して、小作擁護的な革新官僚農本主義が、教学農本主義の農民道徳的意味付けに依拠しながら、耕作農民の自己規制・自助精神を国家奉仕に結び付け、国家統制に対する耕作農民の自覚的同調を引き出すのである。社会運動農本主義は、耕作農民の自己規制、自衛自立を、耕作農民が村落社会における、ひいては理想社会における自治の主体となるべきであるという運動目標に反映させる。ここから、耕作農民が主人公となる理想社会が構想されるのである。アカデミズム農本主義は、耕作農民の自己規制の構造を、内省的方法や構造的意味理解の方法を用いて再構成し、耕作農民の自己規制のあり方が、「家」－「村」－「全体社会(聚落社会)」を貫くものとして、日本社会を構成する重要な要素となっていることを解明することで、農本型社会を理想化するのである。

ところで、応用構造は、論理的に整合しているわけではない。老農農本主義は、自作地主、耕作農民の自衛、自立をめざしているのであり、国家や理想社会が先にあるわけではない。老農農本主義には、家の論理との関わりで国家主義が含まれるとしても、それは、耕作農民の勤労、節倹に、社会的意味を与えることが目的であったのである。また、教学農本主義、官僚農本主義が求める自覚的国家主義は、現存する国家の護持が重要となるが、社会運動農本主義の理想社会は、論理的には、現存する国家である必然性はないのであった。このように、全体としての農本主義の論理構造における応用構造の不整合性は、農本主義の〈多様性〉を示すものである。しかし、多様であっても全体として農本主義であり得るのは、基礎構造の〈同一性〉によるのである。なお、農本主義は、桜井武雄が権力思想と捉え、綱澤満昭は土着思想を分離して、残った農本主義を国家の支配原理の表現と捉えていた。安達生恒は郷土主義(共同体的志向)と捉え、筑波常治は自然にしたがって生きるという土着思想(階級的対立の隠蔽)と捉えていた。それらすべての要素が、農本主義の論理構造には含まれている。その一つを、本質として大きく取り上げるべき根拠はないのである。

このような農本主義の基本構造の中には、農本主義の内的動因も示されている。その一つに、農本主義の〈非体系性〉がある。官僚農本主義にとっては、結果とし

て自覚的国家主義が安定的に形成されればよいのであり、農本主義が体系的理論である必要はなかった。老農農本主義にとっても、農事の発展という実践が重要なのであるから、農本主義が理論的に体系的である必要はなかったのである。加藤完治の神道農本主義も、体系的とは言えないものである。これが、農本主義の〈非体系性〉を印象づけることになる。しかし、菅原兵治の教学農本主義や社会運動農本主義は、体系的である。農本主義が、教学や社会運動と結び付いて社会的影響力を持つようになると、非体系的ではいられなくなる。農本主義は、いよいよ自己を明確に示す必要が出てくるのである。農本主義が非体系的なものから体系化に向かうのは、農本主義の変化の一つの道筋である。もう一つの農本主義の内的動因は、農本主義の〈状況規定性〉や〈矛盾性〉である。先に、「農本主義は、武士、地主、商人、賃金労働者、資本家、官僚、農民組合運動家などの考え方ではない」と述べたが、それは、農本主義の思想の根源についてであり、現実には、農本主義は、さまざまな状況に規定されながら、多様な社会勢力の思想の中に、入り込んで行くのである。それは、表現を変えれば、取り込まれるということでもある。こうして、菅原兵治の郷学農本主義のように旧封建勢力(旧武士)とも結び付くし、横田英夫の小作農本主義のように農民組合運動とも結び付くのである。そうした中で、全体としての農本主義における〈矛盾性〉が生じるのである。これも、農本主義の内的動因と考えることができる。本論文において、各種農本主義を区別したが、それらは、農本主義が、各種勢力と結び付いたことを示している。そうした、老農、官僚、学者、教学者、農民組合運動家、社会運動家などが、農本主義の応用構造を形作るのである。彼等が同一の考え方をしているわけがなく、同じ基礎構造を有しながらも、異なった応用構造を構成することで、各種農本主義の間に〈矛盾性〉を生じさせるのである。この農本主義における〈矛盾性〉を同一地域で示していたのが、山形県荘内地方の事例であった。この事例では、菅原兵治の郷学農本主義と加藤完治の神道農本主義という同じ教学農本主義同士においても、農本主義が結び付いた相手の違いで、〈矛盾性〉が生じることが示されている。また、産青連、荘内松柏会、さらに東亜連盟荘内支部においても、耕作農民が加わった現実的理由が、農事改良にあったことは注目に値する。各種農本主義の展開を、地域レヴェルの組織で捉えると、上部指導層と下部の耕作農民層において、農本主義に結び付く理由の異なることが明らかとなる。これも、〈矛盾性〉の一つであり、農本主義の内的動因である。こうして、例えば、加藤完治の神道農本主義に導かれた山木武夫たちの農本主義は、加藤以上に経営合理主義的なものとなった。また、菅原兵治の郷学農本主義に導かれた長南七右衛門の農本主義は、菅原以上に農事改良主義的となり、「御家禄派」的色彩が薄れている。さらに、石原莞爾に導かれた平田安治は、基本的に農民組合運動から農本主義に転換したとはいっても、農民組合運動的で、農事改良的であっ

た。そうした中に、農本主義の動態が示されている。なお、農事改良は、農本主義の基礎構造に適合するものであったのである。こうして、加藤完治と山木武夫、菅原兵治と長南七右衛門、石原莞爾と平田安治の間には、曖昧ではあるが微妙な「矛盾性」が存在している。換言すれば、農本主義における理念(加藤、菅原、石原)と実践(山木、長南、平田)の微妙な〈矛盾性〉の関係が示されている。このことは、農本主義が地域レヴェルの実践場面に接近するほど、農本主義の基礎構造の規定性が強く作用するということを示しているのである。

このような内的動因、そして外的動因(地主制の展開、資本主義の発展など)が作用して、全体としての農本主義も動いていく。それが、農本主義の歴史的展開に他ならない。それを、桜井武雄、綱澤満昭、安達生恒は、〈農一切主義〉(萩生徂来)から、〈工商との共存共栄主義〉(明治官僚)へ、そして〈非農業への奉仕主義〉(産業資本確立期、横井時敬以後)への変化として、換言すれば、農重視の後退、精神主義への後退という変化として捉えている。そのように捉えると、産業資本確立期以後の農本主義は、農軽視主義、精神主義であって、基礎構造の崩壊したものということになる。こうして、国家独占資本主義期における権藤成卿、橘孝三郎、加藤完治などの農本主義に至っては、耕作農民とは無縁な狂信的な精神主義として描かれることになる。確かに、近代日本において、商工は不必要であるとして、純粋に〈農一切主義〉を主張する農本主義者は存在しない。しかし、純粋な〈農一切主義〉ではないにしても、〈農一切主義〉的な主張は、石原莞爾派の都市解体論、国民皆農論などにも見られ、また、権藤成卿、橘孝三郎にも、農本位的に都市と商工業を位置づけ直し、全体社会を農本位的に再構成しようとする考え方が顕著に認められる。彼等は、〈工商との共存共栄主義〉というより、〈農による商工浄化主義〉なのである。だから、農本主義の歴史的展開過程を、〈農一切主義〉からの農業重視の後退過程として把握することは、適切ではないのである。また、〈非農業への奉仕主義〉が、農本主義の歴史的展開過程の後期に主張されてくると見ることも適切ではない。〈非農業への奉仕主義〉は、農本主義の原型をなす二宮尊徳においても、〈推譲〉の思想の中に認知されるのである。「農」そのものを重視する考え方と、「農」以外のものへの貢献に農の徳性を認める考え方は、前者から後者へと推移してきたわけではなく、農本主義には、初発から両面が含まれていたのである。だから、〈非農業への奉仕主義〉だけを主張する農本主義者は存在しない。特に〈非農業への奉仕主義〉を強調した横井時敬や酒匂常明は、農本主義の基礎構造を共有しないのであり、農本主義者ではない。官僚農本主義も〈非農業への奉仕主義〉に近いが、農本主義の基礎構造を共有する限り、〈非農業への奉仕主義〉の主張に純化するものではないのである。

この農本主義の歴史的展開としては、基礎構造の展開過程と応用構造の展開過程

を考慮しなければならない。しかし、農本主義の基礎構造は、確かに地主制の展開に伴って変化する可能性はあるであろうが、小作農民も耕作農民であると考えれば、自己規制の考え方において、根本的な変化を想定する必要はないものと考えられる。先の『善治日誌』においても、約四〇年間にほとんど変化が認められず、善治は、「正直に根気よく、きまり通りにきまったことをし続けた(8)」のであった。したがって、変化として問題になるのは、農本主義の応用構造である。その展開過程としては、各種農本主義が相互作用(9)しあいながら全体として辿る展開過程と、老農、教学、官僚、社会運動、アカデミズムという各農本主義毎に辿る独自の展開過程が存在するのである。全体としての農本主義の歴史的展開としては、先に述べたような農本主義理念の具体化、明確化、体系化への過程がある。老農農本主義は、二宮尊徳が天地を経文としたように、経験を整理することから輪郭が構成されてくる。それを官僚農本主義は農政目標として具体化し、社会運動農本主義は運動目標として具体化するのである。こうして、農本主義は経験主義を超えて明確化されてくる。その過程において、山崎延吉、岡田温、権藤成卿、橘孝三郎などが、それぞれの運動を体系的に説明し意義を付与しようとするが、農本主義の論理的体系化を直接課題としたのは、教学農本主義であった。菅原兵治の農士道論は、その到達点を示すものである。各種農本主義毎に辿る独自の展開過程については、例えば、萩生徂来、加藤完治、菅原兵治を関連付ければ、教学農本主義の展開となるのであり、再論はしない。

以上のことを、農本主義の論理構造として簡略的に図式化すると、次のようになる。これが、本論文の結論である。

〈非体系性〉、〈状況規定性〉、〈矛盾性〉(内的動因)→歴史的展開

‖

	(老農農本主義)	(教学、官僚農本主義)	(社会運動農本主義)
	自衛、自立	自覚的国家主義	農本型理想社会構築
応用構造	↑	↓ ↑	↑
	勤労、節倹	農民道徳、社会秩序維持、国家奉仕	自治主義
	↑	↑	↑

(農業主義、小農主義、家族主義、勤労主義、共同体主義)

↑

基礎構造　　耕作農民の心性＝自然観、自己規制

基礎構造から応用構造を導出するものが、農業主義、小農主義、家族主義、勤労主義、共同体主義などである。なお、アカデミズム農本主義は、この図の中に図式

化することが困難なため、除外している。

註

(1)川口諦「『日誌』にみる日常生活の形式と主体」、豊原研究会編『善治日誌・解題』、農業総合研究所、一九七七年、三〇頁

(2)～(3)川口諦「『日誌』にみる日常生活の形式と主体」、三六頁

(4)武田勉「米『買出し』業の営業形態と性格」、豊原研究会編『善治日誌・解題』、農業総合研究所、一九七七年、一五八頁

(5)川口諦「『日誌』にみる日常生活の形式と主体」、三八頁

(6)～(7)川口諦「『日誌』にみる日常生活の形式と主体」、四二頁

(8)川口諦「『日誌』にみる日常生活の形式と主体」、四二頁

(9)各種農本主義の相互作用とは、例えば、報徳思想と品川弥二郎、報徳思想と石川理紀之助、石川理紀之助と前田正名、前田正名と岡田温、石川理紀之助を高く評価する石原莞爾派、石原莞爾と加藤完治、山崎延吉と加藤完治、加藤完治と石黒忠篤、石黒忠篤と柳田国男、柳田国男と有賀喜左衛門、権藤成卿と橘孝三郎、権藤成卿と安岡正篤、安岡正篤と菅原兵治などの、人的交流・人脈の作用をさしている。なお、横田英夫は、これらの人脈には位置づいていない。こうした人的交流・人脈が、全体としての農本主義の構成上、いかなる作用を果たしたかは、独自の課題として、追究しなければならない。